

「学び続ける教員像」確立のために求められるリフレクションに関する研究(1)

A Study on the Reflection Required in order to Establish “The Image of the Teacher who Continues Studying” (1)

高根 信吾¹ 三澤 宏次² 新保 淳³

TAKANE Shingo, MISAWA Koji, SHIMBO Atsushi

1. 緒言

本研究は、中央教育審議会の答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」（平成24年8月）をうけて、そこで示された「学び続ける教員像」、いわゆる「反省的実践家としての教員」を目指すうえで、その主たる手段となる「リフレクション」に焦点をあてることに、その端緒がある。

「反省的実践家としての教員」を現実化するためには、普段の授業実践からいわゆるPDCAのサイクルに基づいて授業実践を行う自立した教員像が求められている⁴。しかしながら、①PDCAサイクルの中でも、C→A→P→Dの時間の確保と質的な保障がないこと、②授業省察から再デザインの過程が各教員に委ねられ、他者の視点が入りにくいこと、③授業省察から再デザインの過程に対して、自らの授業実践力の向上を自覚化するものになっていないことなどの学校現場が現実的に抱える問題も、無視することはできない。問題は、授業経験が豊富な教員ほど授業展開から授業省察そして再デザインの過程は、個々の教員の経験の中に埋め込められており、時間が無いが故になかなか可視化されないということである。この可視化されていない部分の掘り起こしをいかにに行い、それをどのようにして実行性のあるものにするかは、教員自らの課題を明確化するためにも、また、教員が自らの授業実践力の熟達化を進めていくためにも重要である。さらにこのプロセスの可視化は、初任者や経験の浅い若手教員といった教職生活のスタート近辺に存在する「未熟練者」にとっても、大きな資源になりうると考えられる⁵。

本研究では、校内研修などのような「特別に設定された研修の場」と、一方で時間的確保が困難な日常の個々の教員における授業実践とのそれらの中間に位置づけられる、「少数の教員集団による自己研修の場」において活用しうる利便性が高いリフレクションシートの開発を試みるものである。またそれによって、図1に示すような「省察」を中核とした「授業実践」力の向上を目標にした実践を行うため

¹ 常葉大学経営学部

² 富士市立吉永第二小学校

³ 静岡大学教育学部

⁴ 塩見みづ江「文部科学省行政説明」全日本中学校長会発行、三町章編『中学校』706号、2012年、pp.51-56。

⁵ 新保淳、長倉守（2013）『『省察』を中核とした授業実践力向上のための方法論に関する研究』『教科開発学研究』第1号、pp.248-249。

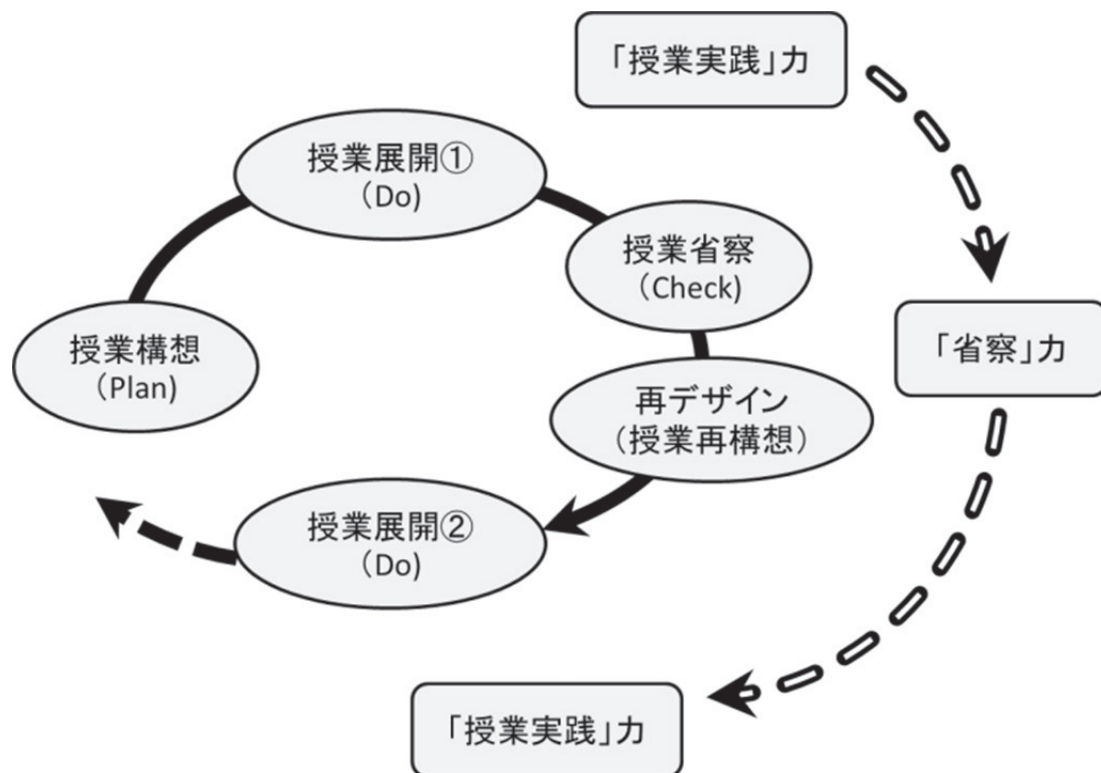


図1 「省察」力を視点としたその前後の「授業実践」力

に、このシートとそれを利用することの効果についての検証を試みるものである。

前述した「授業リフレクション」に関する先行研究の中でも、実行性の点において特に優れていると考えられるのは、鹿毛の「しかけ論」であろう⁶。鹿毛は、図2に示すように、教員の授業実践力を可視化する重要なポイントを「しかけ」という視点を用いることによって、検討を加えている。すなわち、授業に一貫して流れる教員の学習者に対する「授業目標（ねがい）」を、「ツール（教材等）」や「場（学習環境等）」という外部からも観察可能な対象として具体化することによって、それらの「しかけ」に対する学習者の反応（教育的瞬間）を捉えた教員は、「しかけ」を①続行したり、②直したり（「しかけ」直し）、③予定していなかった「しかけ」を導入したり（「しかけ」化）すると想定され、それが後の「省察」の資源になるであろう。

こうした視点に基づいたリフレクションシートを新たに開発し、それに「省察」したことを書き残すことによって、「省察」の可視化が可能となり、教員の判断力と意思決定力などについて他者とともに振り返ることができるようになると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の最終的な目的は、高度専門職業人としての教員養成にむけて、保健体育科における教員が自らの授業実践力を熟達化していくためのリフレクションのシステムを開発し検証することにある。その

⁶ 鹿毛雅治（2008）『授業づくりにおける『しかけ』』、秋田喜代美、キャサリン・ルイス（2008）『授業の研究 教師の学習 レッスンスタディへのいざない』明石書店、pp.152-168。

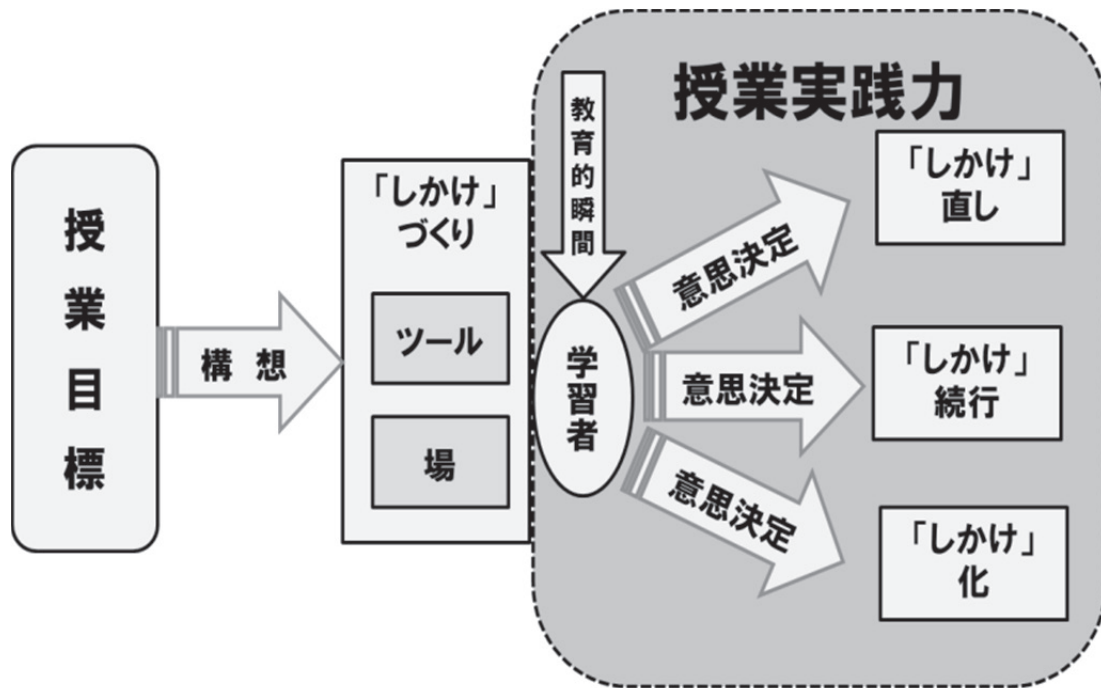


図2 授業実践力の可視化と「しかけ」論

ため本稿においては、まず、教員が反省的実践家として自立することを促すための「省察」を中核とする授業実践力の向上に資する方法論、中でも授業と授業をつなぐ「省察」の可視化を促すために、これまで、どのようなリフレクションシートが開発され、かつその利用システムは、どのようなものであったのかについて批判的検討を試みる必要がある。その上で実行性のあるリフレクションシートとその利用システム、具体的には、リフレクションシート利用の前提となる「少数の教員集団による自己研修の場」における年間計画と単元構想を描くことで、研修システムの全体像を明らかにしておきたい。

3. 研究の方法

本稿では、まず、これまでに作成された「授業リフレクション」ツールの典型例（シート）をピックアップし、実行性の観点から批判的検討を行う。また、授業リフレクションにおける「形式性-実質性」の観点から授業目的との関連性を指摘する。つぎに、経験豊かな小学校教員に協力頂き、体育の授業に関する半構造化インタビューを行う。インタビューでは、より良い授業を展開する上で重要となるポイントを探り、それらを参考にして、教員の授業実践力向上（熟達化）に寄与するとともに、単元および年間計画を視野に入れた授業の展開を可能とするような、実行性の高い「リフレクションシート」を作成する。さらに、その「リフレクションシート」の実質性向上に貢献するであろう「指導マニュアル」を作成する。

4. 授業リフレクションにおけるリフレクションシート

4.1. 教師スタイル確立と授業リフレクション

授業実践力の向上（熟達化）について、坂本は、「学習者一人ひとりの学習に対応できる力量を持つ“適応的熟達者”として発達することに加え、個性的な実践のスタイルを形成していくことが、多くの教師が辿る成長の道筋」⁷と述べている。教師スタイルの形成に関するプロセスを図示すれば、図3のようになる。

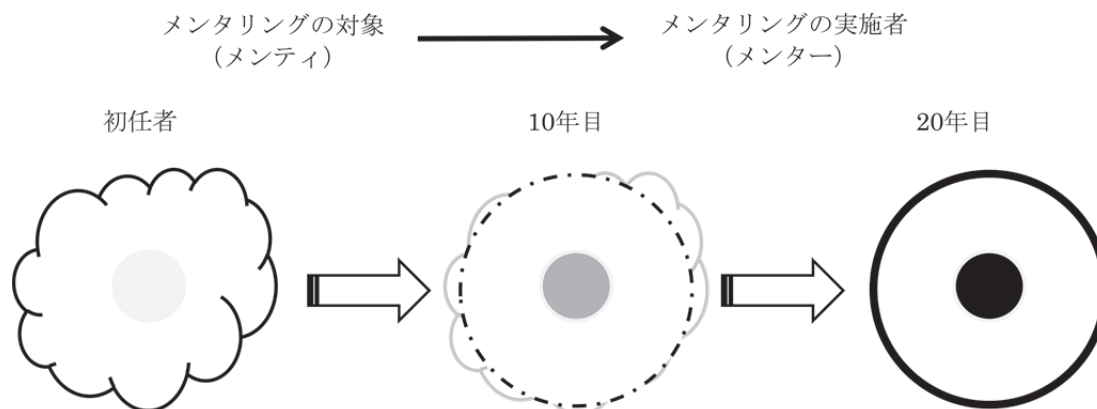


図3 教師スタイルの展開プロセス概念図

このように、初任者の頃は、教員としての中心の部分も周辺の部分も、つまり、授業に関する思い（ポリシー）やそれを実現化させるための方法といったものがまだ明確になっていない状態である。そして、経験を重ね、さまざまな支援を受けることで、それらが確固たるものへと変容していき、自分オリジナルの「教師スタイル」を確立していくのである。しかしながら、経験を重ねるといっても、ただ単に毎年同じ授業を繰り返すというレベルにとどまっているのでは、教師スタイルの確立には結びつかない。教師スタイル確立のためには、「授業リフレクション」という営為が必要不可欠であることはいうまでもない。

ここで、「授業リフレクション」のツールとして公的教育機関から出されているシートをいくつか挙げてみよう。例えば、東京都教職員研修センターのホームページでは、『授業力』診断シート活用資料集において、『授業力』自己診断シートを紹介し、そのシートには、診断項目として、「使命感、熱意、感性」「児童・生徒理解」「統率力」「技術指導」「教材解釈、教材開発」「指導と評価の計画」の作成・改善の6つに分類された計44項目が挙げられている⁸。また、埼玉県立総合教育センターのホームページでは、『学力向上 BOOKLET』において『授業力』自己診断シートを紹介し、そのシートには、診断項目として、「授業力を支える学級経営能力」「児童生徒理解力」「教材解釈能力」「授業構成・実践力」の4つに分類された計14項目が挙げられている⁹。さらに、高知県教育委員会小中学校課ホー

⁷ 坂本篤史（2007）「現職教員は授業経験から如何に学ぶか」『教育心理学研究』第55巻第4号、p.591。

⁸ 東京都教職員研修センター「『授業力』診断シート活用資料集」掲載年不明
(http://www.kyoiku-kensyu.metro.tokyo.jp/08ojt/jyugyo_shindan_sheet/、2013年11月24日閲覧)。

⁹ 埼玉県立総合教育センター「学力向上 BOOKLET」2013年
(http://www.center.spec.ed.jp/?page_id=739、2013年11月24日閲覧)。

ムページでは、教育課程拠点校事業の指定校用各種様式において「授業力チェックシート（教師用）」を掲載し、チェック項目として、「子ども理解」「教材の研究・開発」「授業構成」「指導技術」「学習集団の組織」「保護者や地域との連携」「授業評価」の7つの要素に分類された計20項目が挙げられている¹⁰。

これら3つのシートの共通点は、各項目の評価を容易にするため4件法¹¹を用いていること、そして、リフレクションの網羅性を確保するために評価項目数が多いことである。実行性の観点からすると、4件法による評価はメリットであり、評価項目数の多さはデメリットである。また、これらのシートを教育現場においてそのままの形で利用したのでは、必ずしも研修目的に対応し、それらを具体化した授業実践に即したリフレクションにはならないであろう。なぜなら、研修目的や授業実践には個性があり、それらに焦点化したリフレクションを実施しなければ、形式的なレベルでの授業リフレクションにとどまると考えられるからである。すなわち、教育現場においては、これらのシートを参考にしつつ、それぞれの個性に適應させながらシートを加工し、研修目的に対応したリフレクションを実施することが求められよう。

4.2. リフレクションシートの有効活用

さて、目黒によれば、「授業リフレクション」とは、「教師の意思決定や内面過程に着目した授業研究方法」の総称であり、「VTRを使ったリフレクション」「カード構造化法」「リフレクションシート」「学びの履歴シート」「『日記調』形式による実践報告」「対話による授業リフレクション」「集団による授業リフレクション」「『参加者用振り返りシート』を使った集団による授業リフレクション」の8つの方法が挙げられる¹²。その中の「リフレクションシート」の利用方法については以下のとおりである。

授業者は授業前に「本時のねがい・目標」「当初 Plan」を記入し、授業終了直後に「See（見取ったこと）」「修正 Plan（考え直したこと）」「Do（実際に行ったこと）」を授業の流れに沿って記入する。次にこのシートをもとにプロンプターとともに振り返りを行う。その際、新たな発見や気づきがあればシートに追加記入を行う¹³。

また、鹿毛によれば、「リフレクションシート」は、「4つの大枠があるだけの極めてシンプルな用紙」である¹⁴。4つの大枠とは、「当初 Plan」「See」「修正 Plan」「Do」であり、このようなシンプルなシートは、利用者にとって自由度が高いといえる。しかし、効果を得るためにどこに焦点を当てるのかについては、それを利用する側に任されている。従って、「リフレクションシート」の利用によって十分な成果を得るためには、その研修目的などによる焦点化という営為が必要となる。

ところで、一般に準備や実施に労力をかければかけるほどそこからより多くの恩恵を受けることが可能となるが、準備などに労力がかかればかかることほど実施への接近行動を起こしにくくなり、その実

¹⁰ 高知県庁ホームページ教育委員会小中学校課「教育課程拠点校事業」2013年
(<http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310301/sinkyouikukateikyotenko.html>, 2013年11月24日閲覧)。

¹¹ 4段階で評価する方法。例えば、「4. 当てはまる、3. だいたい当てはまる、2. あまり当てはまらない、1. 当てはまらない」など。

¹² 目黒悟（2010）『看護教育を拓く 授業リフレクション』メヂカルフレンド社、p.20。

¹³ 同上、p.21。

¹⁴ 鹿毛雅治（2006）「リフレクションシートの開発思想」『ネットワーク：東京大学大学院教育学研究科附属学校臨床総合教育研究センター年報』8号、p.27。

行性は低くなる。このことは授業リフレクションにおいても同様であり、準備や記述などの作業量とそこから得られる恩恵の間には正の相関関係がみられるが、作業量と実行性の間には負の相関関係がみられよう。従って、多くの恩恵を受けようと多くの内容を盛り込むような授業リフレクションの方法では、教員が逃避行動を起こすことが考えられ、必ずしも実際に成果を上げることにはならない可能性がある。さらに、ビデオ撮影を行い、事後研修会を設けるなどの学校全体で実施する授業リフレクションを含む校内外研修を年に数回程度開催することは可能であろうし、高い成果も期待できるであろうが、全教員を授業実施者とすることは現実的ではなく、仮に実現したとしても、年に一回程度の授業リフレクションでは、十分とはいえない。以上のことから、授業リフレクションは、実行性の観点から日々の授業やその準備に追われている現職の教員の業務にそれほど影響を及ぼさない程度の作業量で、かつ日常的に実践できる簡便な方法がベターであるといえよう。

5. 本研究におけるリフレクションシートと指導マニュアル

5.1. 個々の授業と単元のリフレクションを実現するリフレクションシートの開発

本稿の目的のひとつに、教員の授業実践力向上（熟達化）に寄与する「リフレクションシート」の開発があるが、そのためにもできる限り実行性の高いシートの提案が、熟達化の鍵を握ると考える。また、授業というものは、多くの場合、1時間の単発な授業で成り立っているのではなく、有機的なつながりを持った一連の営為であり、そこで生起する出来事や行動、発言はそういった文脈の中で意味を持つ。従って、個々の授業はもちろん、それらを有機的なつながりの中で捉えるために、単元単位のリフレクションを可能とするシートであることもまた、必要条件となる。

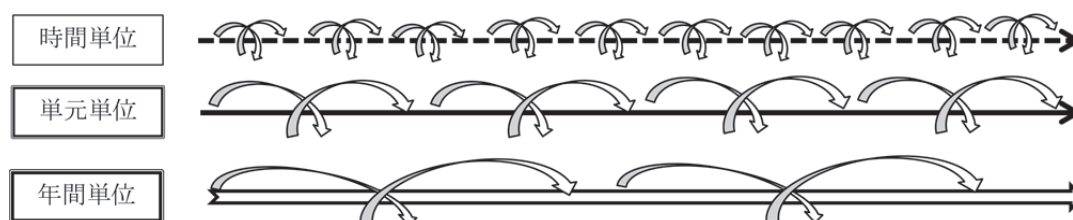


図4 さまざまなレベルのリフレクション

これまでに作成されたリフレクションシートの中で、保健体育科に特化し、かつ単元ごとのリフレクションを可能とするシートとしては、横浜市立高等学校保健体育研究会の「保健体育科『カリキュラム』リフレクションシート」が挙げられる¹⁵。このシートは、「計画力」「実践力」「整理力」「改善力」の4つに分類された計17項目を4件法¹⁶で評価を行うが、残念ながら単元ごとのリフレクションを行うのみで、個々の授業ごとのリフレクションが行えるシートではない。本研究では、毎回の授業のリフレクションを行いつつ、かつそれが積み重なって単元単位のリフレクションとなるようなシートを作成することが目標となる。

さて、本研究では、より良い授業を展開する上で重要となるポイントを探るため、小学校教員歴19

¹⁵ 横浜市立高等学校保健体育研究会「その他 市教委資料」2011年
 (http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/kenkyu/hs-hotai/txt/sonota_shiryo.htm, 2013年11月24日閲覧)。
¹⁶ 4：できている、3：どちらかというのでできている、2：どちらかというのでできていない、1：できていない。

年目の経験豊かなベテラン教員である M 教員への半構造化インタビューを行った¹⁷。そこでは、M 教員がメンターとして機能している回答が見られ、具体的には、M 教員の「授業の進め方や教具の配置など」を他の教員へ見せているという内容の回答であった。また、「体育の授業を実践していく上で、教員として必要な能力、持っていて欲しい能力」を尋ねた質問には、「空間と時間をコーディネートする力」「単元、年間、学年を見通して、授業を構成する力」「体の動きを細かく見る力」「生徒指導力」「学級経営する力」などと回答していた。さらに、「なぜだろう?」「なんでだろう?」といった子どもの持つ疑問、「なぜそうなるの?」「なぜそうなったの?」といった子どもへの発問、「運動するだけ、体を動かすだけではなく、子どもの思考の部分大切にしたい」という回答などがあり、子どもの疑問、教師の助言、子どもの成功、その原因を考えさせるなど、いわゆる鹿毛の「教育的瞬間」についての内容があった。

従って、これらの内容を盛り込んだリフレクションシートを、上述した3つのシートを参考としつつ、M 教員主導のもとで作成し、その一例を資料2として提示した。作成したリフレクションシートは、実行性の観点から、評価項目は10項目に限定し¹⁸、それらを4件法(◎…よくできた、○…できた、△…いまひとつ、×…要改善)で評価し、自由記述のメモ欄を設けた。さらにそれを毎時間行うことで単元単位のリフレクションとなるようなA4一枚にまとめられたコンパクトなシートとした。もちろん、単元ごとの授業目的などによって評価項目の内容を変更するなどのフレキシブルな対応が必要となる。また、授業運営を「2クラス2T」で実施するならば、単元の途中や終了時にシートを2人の教員どうしが相互チェックすることで、より良い効果が期待できよう。さらに、このようにして教員間でリフレクションの観点の共有化ができれば、学校内外の研修においても、大学教員などの専門家からの助言においても、形式的なレベルにとどまらず、実質的なレベルでの助言参加を可能とするだろう。

5.2. 指導マニュアル

さらに、M 教員へのインタビューでは、次年度以降の計画について言及がみられた。それは、「年間指導計画の見直し」であり、具体的には、「学年団ごと(低学年・中学年・高学年)の指導マニュアル作成」という提案であった。この提案は、クラス(学年¹⁹)間で共有できる教場・教具の工夫や「2クラス2T」といった授業運営を設定し、よりリフレクションがしやすい環境整備という意図から行われた。

そこで、本稿では、指導マニュアルの一部となる「低学年：『走の運動』の単元計画」をM 教員に作成して頂き、資料3として提示した。これは、「いろいろコースをつくって、あそぼう!!」という10時間の単元計画であり、A4一枚のコンパクトながら、「指導内容」「具体的な支援」「準備物、集合場所、留意点」など必要事項が盛り込まれている。今後、文部科学省のホームページに掲載されている「小学校体育(運動領域)まるわかりハンドブック」²⁰を参考にしながら、次年度までにこのような単元計画をひとつずつ作成して、学年団ごとの指導マニュアルの完成を目指していく予定である。さらに指導マニュアル作成の際には、単元計画を基準としつつ、年間計画や単元のコンテンツとなる個々の授業を考慮することはもちろん、「授業の目的設定→授業実践→リフレクション→次授業の目的設定」といったマネジメントサイクルをも視野に入れるべきであろう。

¹⁷ インタビューは、筆者(高根)をインタビュアー、M 教員をインタビューイとして、平成25年11月4日に富士グリーンホテル会議室にて実施した。その内容の一部を資料1として掲載した。

¹⁸ M 教員によれば、「評価項目は、教員の負担を考え、多くても10項目程度が適当ではないかと考えている」とのこと。

¹⁹ M 教員の勤務校は、1学年1クラスの小規模校である。

²⁰ 文部科学省「小学校体育(運動領域)まるわかりハンドブック」掲載年不明
(http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/1308041.htm, 2013年11月24日閲覧)。

6. 結 言

高度専門職業人としての教員養成にむけて、保健体育科における教員が自らの授業実践力を熟達化していくためのリフレクションのシステムを開発し検証するという本研究の最終的な目的のために、本稿では、これまでに作成された「授業リフレクション」ツールとしてのシートを対象に、実行性の観点から批判的検討を行った。そして、それらをふまえ、本研究独自の「リフレクションシートの一例」と「指導マニュアルの一部となる単元計画」を提示した。本論でもふれたが、リフレクションシートは研修目的との関連において実質性が高まるので、授業（単元）ごとに適切なシートを作成する必要がある。また、これによってメンターとメンティーにおける授業リフレクションの相違などが可視化されれば、教員の判断力と意思決定力などについて他者とともに振り返ることができるようになり、教員が自らの授業実践力を熟達化していくためのシステムとしての機能が期待できる。

今後の課題は、この「少数の教員集団による自己研修の場」において活用しうる利便性が高いリフレクションシートを実際に活用して、シートの有効性およびそれを利用することの効果について検証することである。

付 記

本研究は、平成 25 年度科学研究補助金（基礎研究（C））課題番号 25350721 を受けて実施された。

引用・参考文献

1. 鹿毛雅治（2006）「リフレクションシートの開発思想」『ネットワーク：東京大学大学院教育学研究科附属学校臨床総合教育研究センター年報』8号、pp.27-31。
2. 鹿毛雅治（2008）「授業づくりにおける『しかけ』」、秋田喜代美、キャサリン・ルイス（2008）『授業の研究 教師の学習 レッスンスタディへのいざない』明石書店、pp.152-168。
3. 目黒悟（2010）『看護教育を拓く 授業リフレクション』メヂカルフレンド社。
4. 坂本篤史（2007）「現職教員は授業経験から如何に学ぶか」『教育心理学研究』第55巻第4号、pp.584-594。
5. 新保淳、長倉守（2013）「『省察』を中核とした授業実践力向上のための方法論に関する研究」『教科開発学研究』第1号、pp.247-253。
6. 塩見みづ江「文部科学省行政説明」全日本中学校長会発行、三町章編『中学校』706号、2012年、pp.51-56。

資料1 M先生へのインタビュー

まずは今年度も授業撮影にご協力いただきありがとうございました。その中で気になった点をお聞きします。障害走(走の運動遊び)の授業のとき、運動場で同時に他のクラスも授業をしておりましたが。

1年のクラスです。私の方(2年クラス)が1時間内容を先に実施しています。

それはどのような意図から？

「1時間差授業実施」といいますか、1年のクラスの先生に、「次の時間はこうやるといいよ」というのを見せるためにです。

スタイルを見せるため？

そうですね。授業の進め方や教具の配置などを参考にしてもらえれば、と思っています。

メンター(指導教員)的な感じでしょうか？

そうですね。次年度はもう少し踏み込んでみたいと思っています。

具体的には？

リフレクションを可能にするための環境設定といたしましうか、共通基盤作成といたしましうか、年間計画や単元計画をそんな感じで立てたいと思っています。文部科学省のHPに具体的な指導事例があるんだけど、それをベースとして、学年団別の、低学年・中学年・高学年の指導マニュアルを作ればなど。当然、学校行事とのからみもあるから、4月から3月まで、やる順番に、この時期はこれをやるというのが、その本(指導マニュアル)をめくれば分かるようにしていきたいです。少なくとも低学年は確実にやれればと思っています。年間指導計画といるのがありますが、次年度はそれの見直し、検討というか、その縦系列を揃えて、体育館や運動場での教具の準備が同じ時期に同じ物を使えるようにしたいと思っています。

例えば、跳び箱とか、ハードルとか？

そうです。そうすれば、朝のクラスが準備して、最後のクラスが片付けるだけで済むから。その分授業時間が確保できるし。

そういえば広見小でもやりましたね。

高跳びのマットやスタンドを毎時間出し入れするのって、結構時間がかかるし、危ないし。ここ(吉永第二小)でも、次年度の年間指導計画の見直しをすることで、担任が体育の授業をもち、学年団での2クラス2Tを行うことが可能になります。

2クラス2Tの方法とメリットを教えてください。

2クラス2Tは、2クラスの授業を同じ教場で、共同で行い、2人の教員(T)のどちらかが、もしくは交代で「T1」となり、体育の授業が行えればと思っています。「T1」は主導する教員で、「T2」はそれを補佐する教員です。2クラス2Tの導入によって、毎回の教員の負担が半分になること、また、体育の苦手な先生にとって、得意な方が「T1」をやることで授業方法を学べる機会になるのではと思っています。ただ、今回撮影してもらった鉄棒なんかは、教具が限られているから2クラス2Tは難しいかな。これまでは同じ学年の2クラスで「2クラス2T」をやってきましたけど、ここ(吉永第二小)では学年団で「2クラス2T」だね。

これまでM先生が働いてこられた職場について教えて下さい。いくつの学校に何年間勤務されましたか？また、そのときの体育の授業の担当や体育主任などの経験状況について教えて下さい。

現在の（富士市立）吉永第二小は1年目。その前の（富士市立）広見小は6年間、そこでは、体育主任を2年間、同学年の「2クラス2T」を3年間実施した。「2クラス2T」は、40代女性、4年目の20代女性、3年目の20代女性と組んで。その前は、香港の日本人学校に3年間。そのうち1年間は体育主任。その前は、（伊東市立）伊東西小に4年間。そこでは、体育主任を3年間、同学年の「2クラス2T」を2年間実施した。「2クラス2T」をしたのは、同じ学年の40代女性と2年間。初任は（伊東市立）伊東南小に5年間。そこでは、体育主任を2年間やった。

教える学年や単元について教えて下さい。教えやすい学年や単元は何ですか？

教えやすい学年は6年生。単元はボール運動です。

その理由は？

初任研のときに、サッカーで研究授業をやったことをきっかけに先輩方からの校内研修のアドバイスなどで学びたいと思ったから。そもそも、自分がサッカーをやっていて、ボール運動に多少なりとも知識があるからかな。自分が富士市の推進委員になって授業を行うにあたって、ソフトバレーボールに関しても結構勉強したしね。

逆に苦手な、経験不足な学年や単元は何ですか？

これまでに1年生を担当したことはないね。今、2年生の担任だけど、低学年は今年2回目。苦手な単元は保健です。

体育の授業で「うまくいった」と思われる時はどのような時ですか？

子どもが意欲をもって取り組んだときかな。やりながら「疑問」が出てきて、「なぜだろう？」「なんでだろう？」って。それが、自分で、または友達との関わりの中で解決できた様子が見られたときだね。で、教師の助言がきっかけとなったり、教師の助言が子どもの気付きにつながったりしたときには「うまくいった」と思うね。

そのときにどのような教師行動が有効だと思いますか？

「なぜそうなるの？」「なぜそうなったの？」「何でうまくいったと思う？」とかを子どもに尋ねて、その答えを子どもが自分の言葉で言えるような助言をする。

逆に「失敗した」と思われる時はどのような時ですか？

場を増やしすぎたり、時間配分を間違えたりして、十分にそれが行えなかったときだね。普段の授業は結構そんなことばかりだよ。

そのときにどのような教師行動が不足していたと思いますか？

わからないな。前の時間からの生徒指導上の問題を收拾できなかったときとか。そう考えると、学級経営がまずできていることが大前提になるね。

体育の授業を実践していく上で、教員として必要な能力、持っていて欲しい能力は何ですか？

「空間と時間をコーディネートする力」「単元、年間、学年を見通して、授業を構成する力」「体の動きを細かく見る力」「生徒指導力」「学級経営する力」「子どもを笑わす力」これは簡単。

体育の授業を進める上で、大切にしていることは何ですか？

子どもが関わる時間、考える時間をつくること。

どうしてそれが大切なのですか？

運動する時間はだれもができるけれど、そこに、どう効果的に考えたり、話し合ったりすることを入れるか、体育の目標が、運動するだけ、体を動かすだけではないから、思考の部分を大切にしたいと思っているからだね。思考の部分が、自分でもまだ納得できる形で評価できる自信がないからかな。

働きがいを感じたときの経験を教えてください。

子どもたちから、「やった」「できた」「楽しい」との声が聞かれたとき。職場の同僚から、体育の授業や行事のことで助言をし、感謝されたとき。

逆にストレスを感じたときの経験を教えてください。

体育の授業ではとくに感じたことはないね。一番のストレスは、親からの苦情。それから職場の人間関係の悪化。そのストレスに対してどのように対処されていますか？

状況によって違うので答えにくいな。簡単に言えば、「耐える」。

学生時代に持っていた「体育教員」「体育の授業」のイメージはどのように変わりましたか？

体育教員のイメージは、さほど変わってないね。しっかり考えている人は考えているけど、考えていない人はほとんど考えていない。小学校の教員で体育のことをものすごく熱心に研究している人がたくさんいる、情熱をもっている人がたくさんいることは他校の研究会に行って、感動したことはありました。体育の授業は、もっと俯瞰的な見方をしていく必要があることかな。

体育の授業時に、どこに視線を向けていることが多いですか？その理由は？

安全かどうか。安全にできることが大前提だから。

子どもたちが関わっているかどうか。授業は学び合う場だから。一人でなら、休み時間でもできるし。

技能に関わる体の部分。どこにつまずきがあるか見取るためだね。

何を考えているか表情やつぶやき。何に困っているか見取るため、学習課題になるものは何かを見つけるため。

時計。時間配分を考えて。

体育の授業を上手く進めるための知識・技術はどのようにして入手しましたか？

まずは、自分の研究授業。他の先生の研究授業を見るなどの研修。本。体育主任の集まり。伊東にいたときは、年2回体育主任者会のあと、夜、必ず飲み会があつて、そこでの体育論や効果的な技能の獲得のさせ方、行事の進め方などを話し合つて、教わつた。とても勉強になったのを今でも覚えているよ。今思えば若かつたので、あまり考えず受け入れることの方が多かつたかな。おかげで「引き出し」は増えた。

どのようなサポートがあれば、よりよい授業が展開できますか？

教師が複数いること。授業の準備物をつくってくれる人がいると助かります。あと記録者、子どもの良い表れや評価を記録してくれる人だね。そのときの発言や行動は覚えているつもりでも、時間がたつと忘れてしまう。あとで成績をつけるとき、こういう人がいて、簡単な文章にまとめてくれると仕事が早くできる。

資料3 低学年：「走の運動」単元計画

走の運動遊び（10時間） 「いろいろコースをつくって、あそぼう！！」

	指導内容	具体的な支援	備考
①	「オリエンテーションⅠ」 ◎障害物のある直線コースをつくって楽しむために単元の見通しをもち、安全かつ意欲的に取り組む。【意欲・関心・態度】 ・内容説明 ・安全の確認 ・試しのコースをつくって楽しむ。	・ハードルの正しい設置の仕方を教え、逆方向から跳ばないように指導する。	▼準備▼ハードル・ミニハードル・ボール・段ボール・カラーコーンなどの障害物を用意する。 □集合場所：倉庫前
②	「オリエンテーションⅡ」 ◎直線ではないコースをつくって楽しむために単元の見通しをもち、安全かつ意欲的に取り組む。【意欲・関心・態度】 ・内容説明 ・安全の確認 ・コースを走って楽しむ。	・「ジグザグ」「ぐるぐる」「とびとび」「かくかく」「ふらふら」「くねくね」コースなど	▼準備▼各コースを事前に引いておく。 ※①と②は1・2年生で裏返してやる。 □集合場所：G中央東寄り
③	「〇〇コースをつくろう！」 ◎目的にあった障害物コースをつくって楽しむ。【思考・判断】 ・グループ毎にどんな障害物コースにしたいか考える。 ・障害物を5つ選び、試行錯誤しながらコースを決める。 ・他のグループのコースを走って楽しむ。	・「とびとびコース」や「スピードコース」など、子どもたちが命名する。	※③～⑧も1・2年生で裏返してやる。 ※2年生が先行し、少し見せると良い。
④	「〇〇コースの遊び方を考えよう！」 ◎コースに合った遊び方を考えて楽しむ。【思考・判断】 ・グループ毎にどんな遊び方をしたいか考える。 ・試行錯誤しながら遊び方を決める。 ・他のグループのコースで遊んで楽しむ。	・へびじゃんけんやリレー、競争など、遊び方やルールを決める。	
⑤	「〇〇コースで気持ちよく走ろう！」	・「〇〇みたいに走ろう」と声をかける。	
⑥	◎コースをよりよく走る方法を考え、コースに応じて巧みに走れるようになる。【技能】 ・どうしたら上手に走れるか助言し合い動きを高める。	・上手な子をお手本にし、師範させる。	
⑦	「コースをもっと楽しくしよう！」	・安全にできるか、より楽しくできるか考えるよう声をかける。	※相手意識をもたせる。
⑧	◎よりよいコースに改良したり、遊び方やルールを工夫したりする。 【思考・判断】		
⑨	「〇年生のつくったコースで遊ぼう！」	・うまいかないコースの声かけをしていく。	※お互いの作ったコースを交流して楽しむ。
⑩	◎ルールを守ったり、勝ち負けを受け入れたりしながら、お互いが作ったコースで遊んで楽しむ。【意欲・関心・態度】 ・コースやルールを紹介し、相手を楽しませる。		

